

2021年度

地球環境『自然学』講座

第3回

テーマ

山口県樫野川流域の森里川海

講 師

山口大学名誉教授

浮田 正夫 先生

2021年5月8日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

浮田 正夫（うきた まさお）



1. 経歴
 - 1967 年 京都大学農学部農芸化学科卒業
 - 1969 年 京都大学大学院農学研究科修士課程農芸化学専攻修了
 - 1969 年 山口大学工学部土木工学科助手
 - 1983 年 京都大学論文工学博士
 - 1989 年 山口大学工学部教授
 - 2007 年 退職 山口大学名誉教授
 2. 現職
 - NP0 法人 うべ環境コミュニティー 理事長
 - 宇部環境国際協力協会 顧問
 - 瀬戸内海研究会議監事、山口県予防保険協会評議員、
 - 周南市、山口市、下関市各環境審議会委員、
 - 榎野川河口域・干潟自然再生協議会 会長
 3. 受賞等
 - 2002 年 5 月 日本環境学会功労賞
 - 2005 年 6 月 日本水環境学会学術賞
 - 2009 年 5 月 廃棄物資源循環学会論文賞
 - 2012 年 11 月 山口県選奨
 - 2016 年 6 月 環境大臣表彰
 3. 著書
 - 河川汚濁のモデル解析：共著、技報堂出版（1989）
 - 環境保全工学：共著、技報堂出版（1997）
 - 環境システム論：共著、共立出版（1998）
 - 瀬戸内海の自然と環境：共著、瀬戸内海環境保全協会（1998）など
- 最近の主な活動 ESD の推進。環境啓発、ごみのリサイクル（特に生ごみ等）、環境保全型一次産業の復活、環境倫理普及、国際貢献など

「森・川・海の現状といま考えるべきこと」

浮田 正夫

1. はじめに

演者は、修士までは農芸化学を専攻し、生化学的な研究を行った。しかし多感なりし頃、水俣病や、イタイイタイ病など公害が大きな社会問題となっていたため、そちらの分野に興味を感じていた。

同じ学科の大先輩が山口大学工学部の教授になっておられ、たまたま助手を探しにこられたので、縁あってそちらの道に方向転換することになった。

工学部土木工学科なので数学や力学が基本の学科であり、随分戸惑い苦労した記憶がある。研究の方法論も農学と工学ではかなり大きな違いがあり、論文をまとめるにも、方法論の開発より、データを集積することに気を取られ、苦労した。

当時、海域の赤潮など、富栄養化が大きな問題になっていたので、テーマは窒素・リンの動態と富栄養化対策として、ようやく 11 年かけて博士論文をまとめることができた。その過程で、河川や湖沼、沿岸海域、都市施設等のフィールド調査をよくしたので、今回の森・川・海のつながりについての、お話を頂いた時、田中 克さんの頼みでもあり、気軽に引き受けさせていただいた。

しかし、弱小 NPO の代表として、その維持に多くのエネルギーと時間を割かなければならない時期と重なり、高齢化による効率低下も重なって、なかなか構想がまとまらず、事務局の方々に大きなご迷惑をかけてしまった。お詫び申し上げます。

現在コロナ禍の中であって、余計に感じる人が多いが、現在は人類史上未だかつてない、危機に向かいつつあると思い、お話の最期は、そのあたりの議論も含めてお話させていただければと思う。

2. 内容としては、1) 流域環境管理との関わりと、樫野川河口域・干潟自然再生協議会の発足までの経緯、2) 調査研究を通して学んだこと、3) 樫野川河口域・干潟自然再生協議会の活動の概要について、4) 協議会の活動を通して学んだこと、5) 里山、里海再生の重要性とこれからの課題 ～持続可能な「人新世」の実現に向けて
- といったものになる。

3. まず、1) については、樫野川河口域・干潟自然再生協議会発足に至るまでの、自分自身の研究や、委員会活動の総会をして、約 20 年前のころの当時の社会の動きを思い出し、お話する背景を理解していただければと思う。

当時は、河川行政でも治水・利水に親水という要素が加わり、また都市のアメニティーも関心を集めた時代であった。ただそのころから、里山・里海の危機が叫ばれるようになっており、都市と農村の共生ということも言われ始めた時代であったと思う。

私も、水源地域の問題や、河川景観のアンケートなどの研究にもかなりエネルギーを費やした。そんな中で、山口県環境生活部環境政策課が、河川を線ではなく面としてとらえる、豊かな流域づくり構想をまとめる委員会を組織され、樫野川も私の一つの研究のフィールドとするようになった。

そのうちに農林水産部森林企画課が「やまぐち森林づくり県民税」とその運用に関する委員

会を立ち上げられ、そちらにも関わらせていただき、新たな知識が広がった。

2004年3月に「やまぐちの豊かな流域づくり構想～榎野川モデル」がまとめられ、同年8月の榎野川河口域。干潟自然再生協議会の発足に繋がっていく。

これらの部分、特に研究に関わる部分は、ゆっくりした説明もなく話がとびとびになるので、お分かりづらいところがあると思うが、ご容赦ください。

調査や研究で学んだ点としては、

① 環境問題は色々な要素が絡むので、総合的に考えること、②N、PだけでなくFeも大事だった。

② 生態学的適正価格の研究からは、結局我々の目標設定が一番大事だということである、河川景観のアンケートでは、意外と人工護岸の河川景観もさほど嫌われず、農家の方々が草刈りが大変だということか。

4. 協議会発足後の活動については、すでに19年目になることから、前半後半に分け、前半部分は、自ら関連の調査をした成果も紹介しながら、お話しできればと思う。この部分も、聴かれる方にとってはやや聴きづらいかもしれない。

後半の部分は、事務局をつとめる、県自然保護課の上原さんのまとめのスライドをお示しするので、比較的わかりやすいと思う。

5. これまでの協議会の活動を振り返って、イベントや環境学習の活動としては事務局のおかげで、それなりに成功を収めてきているが、残念ながら里海の再生そのものの見通しは、まだ明確ではないのが実情である。これまでの体制事態を維持することも、人材や資金の確保の面で、さほど簡単ではないが、やはり漁業が復活することを最終目的として行かなくてはならないと思う。これは、里山の保全についても、まったく同様である。

6. おわりに

2010年10月に名古屋で開催された生物多様性COP10で、里山が評価され、Satoyama Initiativeが国際的市民権を得たのはそれだけ、里山での人間と自然の関係が優れて持続可能なものであったということである。

昨今評判になっている、斎藤幸平さんの「人新世の「資本論」」は33歳の作とは思えない、一読すべき本であり、多くのことを考えさせてくれる。

結局この講義の中で、伝えたかったことは

① 自然はヤワなものではない。

② 里山、里海を維持できる社会体制の再構築、働くことがそのまま、生きる喜びになるような経済の再改革が求められる。

③ ヒトの浅知恵、傲慢さを反省して、「人新世」における責任を果たさなくてはならない。

④ 幼少期に大切な社会倫理、環境論理を含めて、本もののESD（持続可能な開発のための教育）を推進し、達成困難な、地球温暖化対策、自然との共生など重要なSDGsの達成を目指す必要がある。

ご静聴いただき、誠にありがとうございました。

宇部市環境学習ポータルサイト“うべっくる”で色々幅広い環境情報を発信しています。よろしければどうぞ訪問してください。